

新刊紹介：『オランダ東インド会社貿易史料に みる日本磁器』

佐々木達夫

櫻庭美咲、フィアレ・シンシア編『オランダ東インド会社
貿易史料にみる日本磁器』九州産業大学 21 世紀COE
プログラム柿右衛門様式陶芸研究センター、2009 年 3 月。

オランダ東インド会社文書は近世貿易史研究上で第一級の史料として知られる。日本のオランダ貿易、とくに有田磁器の輸出にかんしては最重要の第一次文献史料であり、すでに T. Volker、山脇悌二郎、Cynthia Vialle らが研究史料として用い、研究成果を挙げた。その基本史料部分(長崎商館の仕訳帳における「磁器」)の原文と訳文が紹介され、日本磁器の輸出研究分野の基本史料集成書として評価できる。

本書によると、オランダ東インド会社は 1602 年に成立し、オランダとアジア各地の貿易を行い、1619 年以降は総督府がバタヴィアに置かれ、管理運営の文書やアジア各商館からの注文書が残されていた。会社文書は 1795 年で終わる。日本磁器に関しては、オランダや各商館からの日本磁器注文書は総督府経由で長崎に転送されることが多いが、台湾やトンキンから日本に直接届くこともあった。日本商館文書は 1609 年に始まり 1860 年に終わり、東インド会社の各拠点に残された文書のなかで、保存状態がもっとも良い。商館長と評議会による文書、倉庫長、簿記係、書記長が作成する文書に別けられる。それらは決議録、商館長日記、書翰集、会社職員と日本側当局との往復書翰、貿易に関する記録である。

貿易に関する記録はさまざまな文書にあるが、バタヴィア及び他の商館から日本商館への注文書は日本磁器研究に欠かせない文書である。商館長日記には、磁器商人との交渉や契約についての記載がみられ、これまでは Volker の研究で知られていた。書翰集には、オランダやアジアの商館からの注文書をバタヴィア総督府が取りまとめ、日本商館へ転送した文書や、出島商館が総督府や各商館宛に返信した文書がある。仕訳帳は 1620 年から 1808 年までの会計帳簿類であり、取引日、輸入品と輸出品の種類と数量、価格、船荷送付先、費用、損益などが記録される。磁器については、発送日、

船名、送付先、数量、種類、価格、梱包状態、装飾の記載がみられる。

肥前磁器が東インド会社の公式貿易品として輸出されたのは 1650 年から 1757 年の間である。1658 年の文書には、日本磁器の支払いが銀のみで、即金売り渡しは 1% 値引きと決定された。1663 年の文書には、あらゆる種類の日本磁器 9,000 ギルダー相当を注文し、もし中国磁器が入手可能なら中国磁器を送れと記される。オランダからバタヴィア宛の 1664 年文書には、過去数年の間にオランダが受領した磁器は粗雑に梱包され、注意深く取り扱うには大きすぎる木箱に入れていたため、かなり破損したと指摘し、磁器を樽かより小さな箱に入れることが可能か調査するよう指示があった。

有田磁器はオランダ東インド会社の公式貿易(1650～1757)、社員による私貿易・脇荷(会社は 1667 年から認めた)、唐船の三形態で長崎から輸出された。数量が分かるのは公式貿易のみであり、文書の残らない脇荷、唐船による輸出量はバタヴィア城日誌などの例外を除いて推測の域をでない。山脇悌二郎が集計した有田磁器輸出量は約 120 万個であったが、それは本書が集計した数字ときわめて近く、Volker の集計数量は誤りが多いという。年代別にインドネシアや東南アジア、インド、ペルシア、オランダなどへ運ばれた有田磁器の数量と種類が一覧表に集成されている。医療品に用いる薬壺や食器の皿など、どの地域や年代にどの種類が多いか、一目瞭然である。

遺跡出土品や博物館藏品との関係も興味深い。インドに色絵が運ばれ、ムンバイ博物館に初期柿右衛門色絵皿が展示されていること、スリランカに装飾的な蓋付壺が運ばれ、コロンボ博物館藏品に柿右衛門色絵人形があることと等、こうしたことと関係が見られる。ペルシアには茶碗が多く、次いで皿であり、その他の器種は注文がない。これも当該地の食生活に良く合う。ただしペルシア湾岸で 17 世紀の有田磁器はまだ遺跡から出土していない。本書の表をみると、遺跡出土品や美術館藏品との関係が思い起こされる。もし有田の磁器を積み、航海途中で沈んだオランダ船があったとすれば、沈没船の名前や行き先、積み荷、年代などを知る史料が本書のなかに見いだせることとなる。

(e-mail: tatsuosasaki@hotmail.com)